小學讀本

三

特34
971

081646-001-8

特34-971

小学読本 巻3，4

文部省編輯局

M23

DAC-6444

特34 971 №30631 22

小學校教科用書

小學讀本

明治二十三年四月 文部省編輯局

富國唯屑

小學讀本卷之三

第一課 職業に貴賤無〜

○紙屑買 ○古金買 ○賤しき ○厭ふ ○心得違ひ

きと富めるとは、多くは其職業によるものにあらず、唯其人の勉強するとせざるとによることなり。又世の中に、紙屑買、紙屑拾、ぼろ買、古金買、破硝子(ワレガラス)買などを、賤〜き商賣なりとて、間厭ふ

小學校教科用書

小學讀本

明治二十三年四月　文部省編輯局

特34 No.30631
971
22

富　唯　屑

小學讀本卷之三

第一課　職業に貴賤無し

○紙屑買　○古金買　○賤しき　○厭ふ　○心得違ひ

人の貴きと富めるとは、多くは其職業によるものにあらず、唯其人の勉強するとせざるとによることなり。又世の中に、紙屑買、紙屑拾、ぼろ買、古金買、破硝子（ソレルラス）買などを、賤しき商賣なりとて、間厭ふ

ものあれど、こは、甚〜き心得違ひなり。　何となれば、世に無くてならぬものならば、いかにきたなくとも、其業の貴さは、少〜も他の清く美く〜きものにおとらぬものなり。　故に、人は、何職何業を問はず、能く我身に叶ひたるを選びて、少〜も厭ふ事なく、心を專らにして勉強すべき事なり。

作文　話の書取り

第二課　もしなくば

○木挽　○簞笥　○庖丁

世に、もし鋤、鍬、鎌無くば、農夫は、何にて田畑を耕す可きぞ。　世に、もし鋸、鉋、鑿、錐、斧なくば、きこりは、何にて木を切り出し、木挽は、何にて木を挽き、大工、指物師は、何にて家、倉をたて、箱や簞笥を作るべきぞ。　もし又屋根葺に、かなづちと、はさみと無く、疊指に、針と庖丁となく、左官に、鏝無くば、如何にして、屋根を葺き、疊を指し、壁を塗らんや。　汝等、是等の道具を作る者は、誰なるを知れりや。　其

人は、今、つぎの課に出で來るべし。

作文　(一)指物師に、机を注文する文。(二)同じうけあうたる文

第三課　鍛冶　一

○鐵鋏　○鐵槌　○鐵床

○物ともせず　○すさまじく

こゝに人あり、其人は、土さへ裂くる夏の日に、足のさきには、鞴を使ひ、左の手には、鐵鋏をにぎり、右の手には、重き鐵槌をふり揚げて、赤くやきたる鐵ぎれを、鐵床の上にて打ちたゝけり。たゝくに連れて飛び散る火花を、物ともせず、いとすさまじく働けり。こは、是れ如何なる人ぞ、汝等の知れる鍛冶屋なり。

作文　鍛冶屋の作るものは、何々なるか。

第四課　鍛冶　二

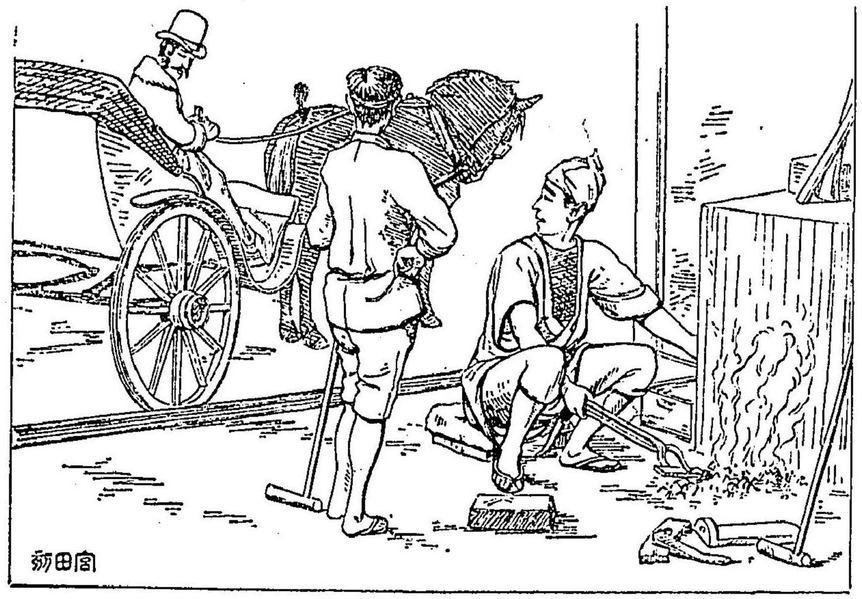
○馬車　○うなづきて

○ちばしが間　○銀貨

此時、一つの馬車來りて、其前に止まれり。車の内にて、「鍛冶屋どの、急ぎ、車の留釘を作りて下され」

釘　汗　望　速　悅　貨

といふ。　鍛冶屋は、直にうなづきて、そば〳〵が間、汗も拭はず打ち鍛ひ〳〵が、たちまち其望に叶へる釘は出來揚れり。　其人、よ〳〵く速に出來たりと打ち〳〵悅び、一圓の銀貨を取り〳〵出し〳〵、「是れで其身の汗を



拭うて下され」といひて、其手の内にれくやいなや、ふたゝびむちを揚げてはせ出でぬ。

作文　(一)一帖二錢の紙三帖、一丁五錢の墨二丁を賣りし時の請取。
(二)三十錢の本一册、八錢の硯一つ、五錢の洋紙一枚を賣りし時の請取。

第五課　愚なる男

○危きに　○見合はせたり　一、○堪へかねたり

こゝに一人の男あり、いと愚なる男なり。　初めは樵(キコリ)となりたるに、斧の重きに堪へかねたり。　次に

危　恐　驚　厚　杵　臭

は木挽となりたるに、大鋸の重きに堪へかねたり。次には大工となりたるに、手斧の危きに恐れたり。次には屋根屋となりたるに、屋根の高きに驚けり。次には疊指となりたるに、床の厚きによわりたり。次には鍛冶屋となりたるに、夏の暑きにこまりたり。次には農夫となりたるに、肥の臭きにこまりたり。次には米搗となりたるに、杵の重きに見あむせたり。終には紙屑拾と思ひ〜が、賤〜き業と

若　遂　泣　待

て見合はせたり。

作文　○金錢の種類。

第六課　愚なる男　二

○與ふる物　○悔ゆるのみ　○遂げざりし

いと愚なる此男、もはや爲すべき事も無〜、此上爲すべき時もなし。　ア、我ながら愚なり。　我は、何とて若き内、樵の業をば遂げざり〜。　我は、何とて若き内、紙屑拾をせざり〜ぞと、泣けどさけべど、手

命　繋　與　悔　　兒　途

は利かず、足叶はねば、唯人の、投げて與ふる物を待ち、細き命を繋ぐのみ、老いたる身をは悔ゆるのみ。

作文　(一)注文の品物を送る文。(二)同じ請取の文。

第七課　小兒等の遊歩　一

○途中　○大豆　○小豆　○見聞　○小兒等

今五六人の小兒らは、打ち連れて、村里より町近き所に來れり。此小兒等は、途中に如何なる物事を

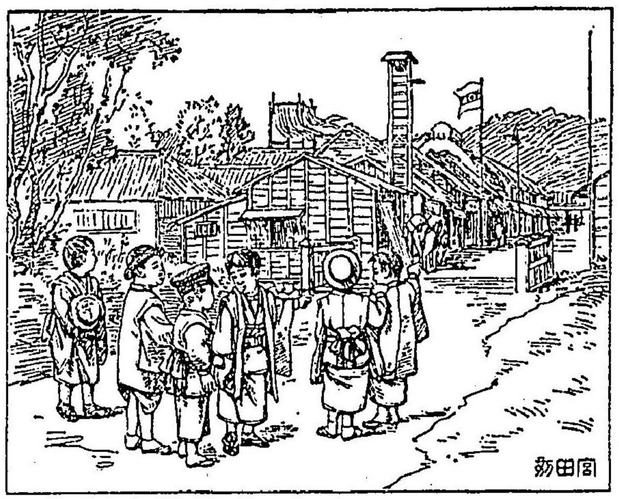
干　炭　燒　烟　薪　音

見聞せしぞ。今は秋なれば、田畑には、稻をかり、わたを取り、大豆、小豆などを掛干すを見、また遠き野山には、炭を燒く烟、近き林には、薪を切る音などを見聞せしなるべし。

作文　○話の書取。

第八課　小兒等の遊歩　二

○染物屋



聳　染　印　旗　響　鍋　桶

○聳たる　○印し

小兒等は、町近き所に來りて、又如何なる物を見聞するや。　先づ高く聳えたる火の見は、もとより、染物屋の染物の、高く風になびくを見、其他樣々の印しある旗などを見るなるべし。　又次第に耳に響くものは、鍛冶屋の鐵を鍛ふ音、銅屋、ブリキ屋などの赤鍋、やくわんなどを作る音、米屋の米を搗き、桶屋のたがを掛け、大工、指物師の木を挽き、釘を打つ

綿　等　賑　勇

音、又近づきてハ、綿打の綿を打ち、機屋の機を織る音などなるべし。

作文　(一)人を遊歩にさそふ文。(二)同じ承知の文。(三)同じことわりの文。

第九課　小兒等の遊歩　三

○天長節　○勇まじく

此小兒等は、右の如き種々なる物を見、樣々なる音を聞きて、一人の小兒「アヽ、賑やかな事では有りませぬか、私は、人々が、何時よりも賑やかに、そゝて

節　喜　祝　中　積

勇まゝく、働く樣に思はれますが、皆樣は、如何で有りますか」といへば、今一人「左樣で有ります、これは私どもが待ちに待つ、天長節が近づいたゆゑ、人人も喜ゝく有り、また其前に、仕事を勉強して、緩々天皇陛下をれ祝ひ申す積り故で有りませう」などいひあへり。

作文　○此ツギノヤスミニ　ドコデ　何ヲシテ　遊バウト思フカ、又其處ハ　ドノヤウナ所カ。

治　給　末　奥　共　萬　歳

第十課　天長節　○我國にだに　○諸共に　○聖壽萬歳

天長節は、汝等も知る如く、我大日本國を治め給ふ天皇陛下の生れさせ給へる、めでたゝともめでたき日なれば、たとひ野の末、山の奥にても、我國にだに住むものならば、諸共に、職を休み、業を止め、悦び樂みて、聖壽萬歳と祝ひ奉るべきことなり。

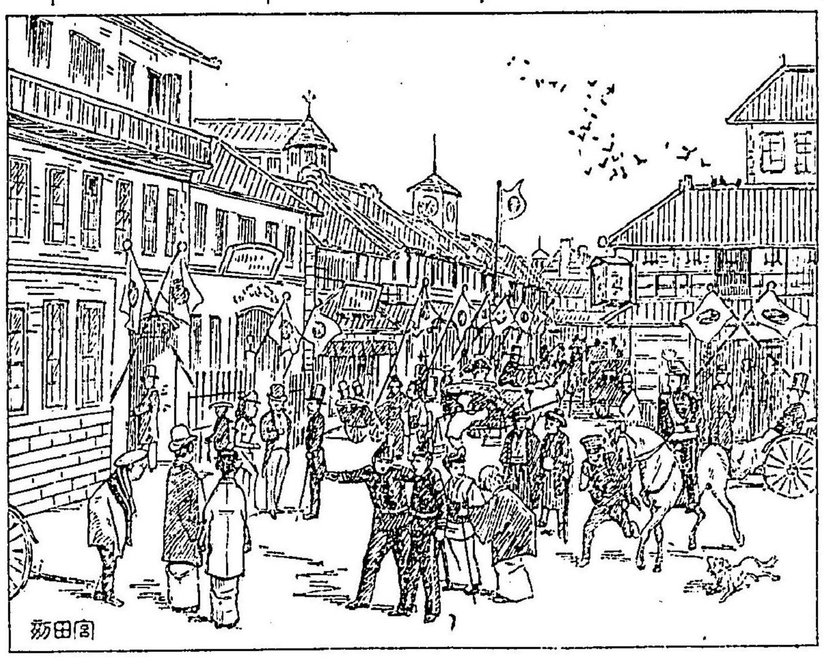
作文　(一)天長節に人をまねく文。(二)同じ返事。

第十一課　天長節の歌　第四段

段　惠　民　榮　臺　柴　君

○民草　○大御世　○我大君
○萬世　○千世　○八千世
○今日

惠の露のかゝらずば、民草、いかで榮ゆべき。此大御世に生れずば、此さち、いかで得らるべき。玉の臺も柴の戸も、我大君の萬世を、祝ふ盃とりぐに、歌ふ今日ころ樂しけれ。



君は千代ませ、八千世ませ。
君は千代ませ、八千世ませ。

作文　○話の書取。

第十二課　親　○敬ひ尊ぶ　○愛し親しむ

尊　敬

汝等は、皆、我天皇陛下の、此上もなく尊くあらせられて、諸共に敬ひ尊び奉るべき事は、常に忘れぬこ

忘　答　問　位　親　愛

となるべし。　さかるに、今、天皇陛下に次いで、敬ひ尊ぶべきものを、誰と問はゞ、如何に答ふるや。　汝等は先づ、其次ぎ次ぎの、位高き人を思ひまはすなる可し。　位高き人々を敬ひ尊ぶべきは、もとよりの事なれど、近く我身を生みそだてたる親有れば、先づ是れをば敬ひ尊び、其上にも、ふかく愛し親しむべきものなるぞかし。

作文　(一)人の家の無事か、いなやを聞合はする文。

悲　衰　居　面　育　勞

第十三課　老

○たくましかりし　○身體　○立居　○末頼もしく　○面白　○父祖　○孝行

れよう、人の年老いたるほど、あはれに悲しきは無かるべし。　昔は、強くたくましかりし身體も、次第に衰へて、今は、立居さへ、思ふまゝならず、昔は、行く先き長しと思へば、何事を爲すにも、末頼もしく、勇ましかりし心も、今は、弱りはてゝ、何一つ樂しく、面白きことも無くなりぬ。　れよう、是等の人

祖孝

ゃは、若き時より年老ゆるにいたるまで、多年の間、其子や孫を養ひ育つる爲に、心を苦め、身を勞したるものなれば、其子孫たるものは、常に、父祖を敬ひ尊びて、ひたすら其老をなぐさめ、厚き養育の恩に報ゆべし。　すなはちこれを孝行といふなり。

作文　○孝行とハ、如何なる事なるか。

第十四課　紙屑買　一

○本手　○餘分　○しとやかに　○祖母　○飢ゑたる

籠或飢逢救餘禮廣

こゝに、れ孝とよべる貧しき女の子あり。　常に、紙屑を買ひ歩き、母とともに、老いたる祖母を養へり。　れ孝は、いつもの如く、紙屑籠を肩にかつゝ、或村里に入らんとす。　其時途中にて、あはれに飢ゑたる老人にゆき逢ひたり。　れ孝は、如何にもして、

此老人を救ひたくは思へども、本手より外、餘分の金無ければ、爲すべき樣なし。　されば、少し近づきて、しとやかに禮を爲して、行き過ぎたり。　老人は、これを見て、喜しげに、ア、善き女の子よ、此廣き世の中に、禮を爲しくるゝは、そこばかりぞとて、いと悅べる樣子なりき。

作文　(一)我家内の無事を知らする文。

第十五課　紙屑買　二

○あるじ　○十錢銀貨　○請け納め　○なさけ

詰　堅　包　感　請　逃　逝　納

さてれ孝は、其村に入り、或家にて紙屑を買ひ、それを籠に詰め入るゝに、何やら、堅き物の、手にさはりたれば、取り出し見るに、十錢銀貨の、紙に包まれたるなり。　驚きて、其家のあるじの前に出せば、あるじは、れ孝の正直なるに感じて、かへすにれよばずといへども、れ孝は、けつして請け取らず、早や逃げ出でんとするを、あるじは引き留め、強ひて其ふと

ころに推し入れたり。れ孝は、其時急に、前の老人の事を思ひ出したれば、厚く禮を述べて、請け納め、直樣前の老人にれひ付き、其故を話して、これを惠みければ、老人は、ふかくれ孝のなさけに感じ、なみだながら、禮を述べ〜とぞ。

作文　○話の書取

第十六課　禮信仁

○行ひ方　○備へて　○詐り欺く　○我力に應じ

對　詐　欺　信　應　情　仁　備

れよう、人に對して、敬ひ愛する意を表はすは、これを禮といひ、正直にして、少しも詐り欺くこと無きは、これを信といひ、又我力に應じて、人に情をかけ、惠み助くるは、これを仁といふ。　人たるものは、常に此三つの德を備へて、一つをもかくべからず。

もからざれば、善き人とはいはれぬなり。　人もし、善き人といはれずば、更に世に生れたるかひ無かるべし。　汝等は、前の課なる、れ孝が話をよくし

味ひて、禮、信、仁の行ひ方を心得べし。

作文 (一)歳暮の祝の文、(二)同じ返事。

第十七課 鹽

○うしほ ○海邊 ○鹽田 ○煑詰 ○何方

汝等は、鹽の鹽辛く、さたうの甘き事は、能く知りたるならん。 されど、未だ何より取り、如何にして製するものなるかを、知らざるものも有るべし。 鹽は、常に、海水より取るものにて、其の仕方は、うしほをくみて、海邊の砂原に、度々ちらして、日

に乾かせば、鹽は、砂粒の表にこはばり付く、この砂原を、鹽田といふ。 さて、其砂をかきよせて、竹ざるにもり、水をかけて、其鹽をとかしてうれを竈にて煑詰むれば、つひに白く清らかなる鹽となるなり。 れより、鹽は、海邊の國國には、何方にても製するも

のなれど、最も名高きは、播磨の國の赤穗、阿波の國の齋田にて、製するものなり。

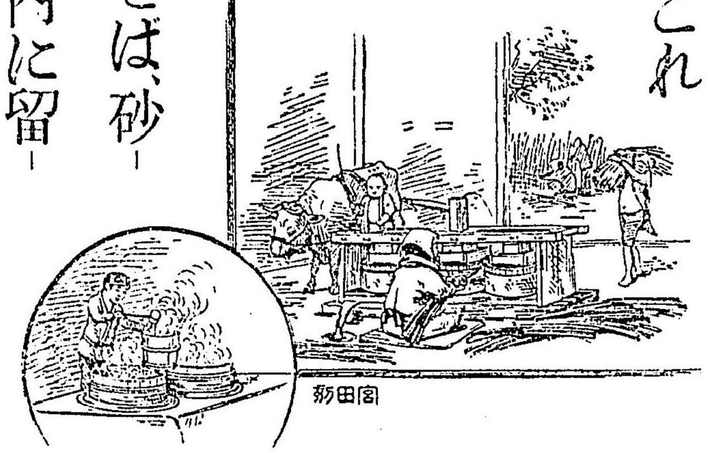
作文　○善き人とハ、どのやうなる人なりと思ふか。

第十八課　砂糖

○上等　○上品　○器械　○蠣灰
○蜜　○白下　○太白　○三盆　○雪白
○簡略

砂糖は、多くさたうきびよりおぼりたる汁を、製したるものゝ内、其品に黒、白、氷の三種あり。今、

白砂糖の製し方をいはゞ、先づさたうきびの莖を、器械にて、しめて、其汁をしぼり、これに、少しばかりの蠣灰を交へて、煮詰むるときは、砂糖と砂糖蜜と交れる、白下といふものになるなり。　この白下を、ぬのに包みて、れしぶねにかけて、れせば、砂糖蜜は、流れ出て、砂糖は、ぬのゝ内に留



まるべし。　此砂糖を取り出して、手にてねり廻はし、ふたゝび、もとのぬのに包みて、れしをするなり。かくすること度々すれば、色白くなり、次第に上品となるなり。　太白、三盆、雪白などいふは、其品々の名なり。　黑砂糖は、其製最も簡略にて、右のきぼより取れるまゝの汁を煑詰めて、之に多くの蠣灰を交へてかためたるものなり。　又氷砂糖は、上等の白砂糖をとかし、煑て、仕方を以て、其内にふくめるかすやあくたを取り、之を緩々と冷やすなり。

砂糖を製する所、多しといへども、白砂糖は、讃岐、黑砂糖は、薩摩、大隅を以て、上品とす。

作文　○年始の文。

第十九課　油蠟

○舉げ難けれど　○日用　○油菜　○油桐　○食用　○桐油　○魚油　○石油　○蠟燭

油は、其種類甚だ多くして、一々舉げがたけれど、今

舉　桐　鮒　鰯　燈　鯨　燭

其日用の品のみをいはゞ、胡麻、油菜、綿、荏、油桐などの實をとりて、取りたるもの、鮒、鰯、などの魚類をとりて、取りたるもの、ならびに、石油等なり。胡麻油、菜種油は、常に食用となし、また燈油ともなす。綿實油、魚油は、燈油にのみ用ひ、荏の油、桐の油は、桐油、からかさ紙などを製するに用ひ、石油は、專ら、らんぷに用ふるものにて、石油をふくめる地をふかく掘りて、くみ取りて製したるなり。

寢　起　峰

蠟は、漆、はぜ漆などの實、または、はちのす、鯨のあぶらなどより製するものにて、これをもちて、蠟燭、びん付けを製し、其外樣々の用をなすものなり。

作文　○話の書取。

第二十課　炭燒き　○祖父　○寢起き　○炭商人

こゝに、細長き木を、竈の内に積み居る老人あり。其側に、木を運びなどして、其老人を助け居る小兒あり、是は、祖父と孫とにて、炭を燒く所なり。其

塞　消　俵　楢　樫

わきの方に、木の枝にて葺きたる小屋あり。　これは、炭を焼く間、此二人が、寢起きするところなり。こゝは、さびしき山の奥なるが、我等が、時々遠くより見ることある、峯の烟は、かゝる所より立つものなり。　さて、炭を焼くには、竈の中に積みたる木に、火を付け、少しづゝ、もえ

あがりたる時に、其口を塞ぎて、火を消すなり。　其火の能く消えたる後、ゑづかに炭を取出し、これを俵に入れて、ふもとに運び下し、炭商人に賣るなり。

凡そ、炭に焼く木は、楢、くぬぎ、樫などの堅き木をよしとす。　又ほゝの木にて、製したる炭は、多く物をみがくに用ふ。

作文　○花見ニ人ヲマネクコトバ。（之ヲ手紙ニ書キ直スベシ）

アタ、カナシセツニナリマシタガ、オタツシヤデオメデタク

ゾンシマス。シカレバ、ワタクシカタニチカキ山ザクラ、イマガ。
サカリデアリマス。モシオヒマナラバ、オイデナサレマセヌカ。
イナヤゴヘンシヲネガヒマス。

第二十一課　茶　烟草

○蒸籠　○焙爐　○何處
○産物　○刻烟草　○一面　○差あり

茶は、椿などゝ同類の植物なり。これより、茶を製するには、夏の初に新芽を摘み取り、それを蒸籠にて蒸すか、又は熱湯にとほしたるを、焙爐にて焙りながら、手にてもみ乾かすなり。

椿　新　摘

蒸　焙　爐　差　産

茶は、其製し方により、上中下の品々ありて、其價も亦大なる差あり。我國産物中の重なるものにして、何處にもこれを出すといへども、古くより名高きは、山城（ヤマシロ）の宇治なり。

烟草は、莖太く、葉廣く、一面に細かなる毛あり。

春、種を蒔き、秋になりて葉を取り、これを乾〜して、刻烟草、又は卷烟草に製す。烟草を產する地、甚ざ多〜といへども、最も世に聞えたるは、國府烟草、薩摩烟草なり。

作文　○焙爐。○蒸籠。

第二十二課　つゝしむ可きもの

○身体　○勿論　○身を持ちくづす

酒、烟草、茶、菓子の類は、多くは慰みに飲み喰ひするものにて、よき程に用ふれば、別に大なる害にはならぬものなれど、とかく程を過〜易きものなり。されば、成る可くつゝしみて、多く飲み喰ひせざる樣にすべし。中にも、酒の類は、最も恐ろ〜きもの、にて、其身体を害することの甚〜きは勿論、これよりて、心を亂し、身を持ちくづすはじめとなる。

こと多きものなれば、年若き中は、必ず飲みならふべからず。

作文 ○花見ニマネカレシ時ノ返事ノコトバ。〔前ノ如ク手紙ニ書キ直スベシ〕オホセノトホリ、アタヽカナシセツデアリマスガ、マスマスゴキゲンヨクイラツシヤリマシテ、オメデタクゾンシマス。サテ、花見ノコトオマウシコシデアリマスガ、アヤニクサシアヒガアリマシテ、ザンネンナガラマ并リカネマス。ナニトゾ、アシカラズ、オボシメシクダサリマセ。

第二十三課 教を守る時なり ○殘念

○君達 ○怨をかへす

一筋の川を、西と東とにへだてゝ、二つの村あり。或時、此方の子供の揚げたる凧、あやまりて向岸に落ちかゝるを、向ふ岸なる子供は、情なくも之を川中へ投げ入れたり。此方の子供は、殘念に思へど、川をへだてゝの事なれば、せん方もなかりき。然るに、其後、向岸なる子供の凧、此方の岸の柳に引きかゝりければ、此方の子供は、すは怨をかへすは、

此時ずと、かけよるを、一人の子供、これをれ〜とめ、君達は、先きにかれらのせ〜事を、惡き事と思はずやといへば、皆々、もとよりなりといふ。　其子供、惡き事は、必ず學ぶなとは、常々先生の教へらるゝ事ならずや。　されば、今は、我々の怨を反す時にあらず〜て、先生の教をまもるべき時なりと思ふは、如何にといふ。　皆々は、いづれも善きものなれば、いかにももつともなりとて、其凧を破れぬ様に取り下ろ〜、これをさ〜上げて、糸を引かせければ、向岸の子供は、大に恥ぢ入りて、一向前日の惡かり〜をわび、これよりたゞひに睦〜くなり〜とかや。

作文　○凧の作り方。

第二十四課　紙　苧

○洋紙　○質　○通例　○延紙　○雁皮紙　○毎年

紙は、楮や三つまたの外、かはやなぎ、くは、藁、麥藁、竹などより製〜、又洋紙の類は、ぼろ、木屑などを以

て製す。　紙は、其質と製〜方とによりて、種々なる名あり。　今我國にて、最も通例なるものをいはゞ、奉書、糊入、美濃紙、半紙、延紙、西の内、半切、雁皮紙、ちり紙等なり。　紙は、諸國製ぜざる所なしといへども、最も、多く出すは、美濃、土佐などなり。

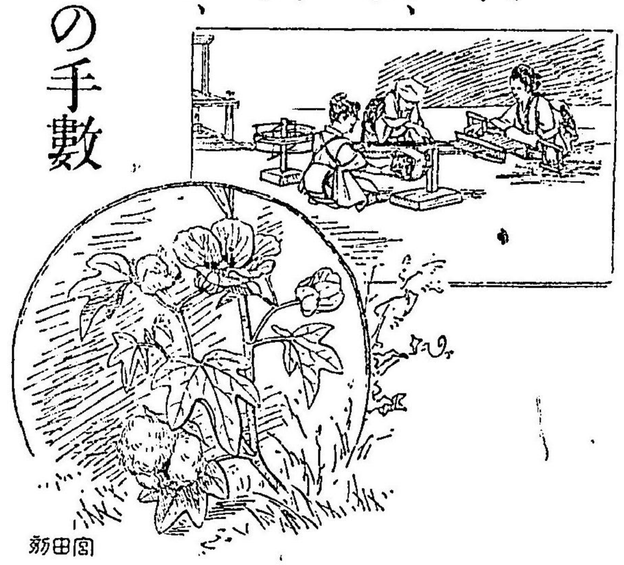
苧は、麻、苧麻などの皮より製〜たるものなり。　麻、苧麻の類は、共に畑に作るものにて、麻は、一年草なれど、苧麻は、毎年根より生ゆるものなり。　苧麻は、糸、繩の類を製するのみならず、細くうみて、我々の夏の暑さをさのぐべき、布、縮を織り、又其糸をあみて、網類をも作るべし。

作文　(一)夏の頃祭禮に人をまねく文。

第二十五課　綿布　○衣服　○木綿　○縞機　○機

○縞割　○背丈

汝等の、常に着る衣服は、何にて製せしものぞ。多くは、綿布なるべし。汝等は、其綿布の、かく衣服となりて、其身に着くまでには、如何程の手數のかゝりしことを知るや。今其あらましを言ふ可し。先づ、木綿を畑に作り、其實の熟して、綿を



はくを待ちて、これを取り、綿繰にて繰りて、種を去り、綿打師に賴みて、打綿となし、次にしのにて卷きして、しの卷となし、糸車にて引きて、糸となすなり。其糸は、掛車に繰りあげ、縞機ならば、縞割りをなして、これを染物屋に送り、好みの色に染めさせ、次にのりを付け、小囊に繰りて、竪糸と横糸とに分つ。竪糸は、延べてこれをろくろへ、一筋づゝ綾にかけ、筬に通し、機卷に卷きて、機に仕掛け、横糸は、くだに

卷きて、杼にはめ、織り揚げて綿布となすなり。

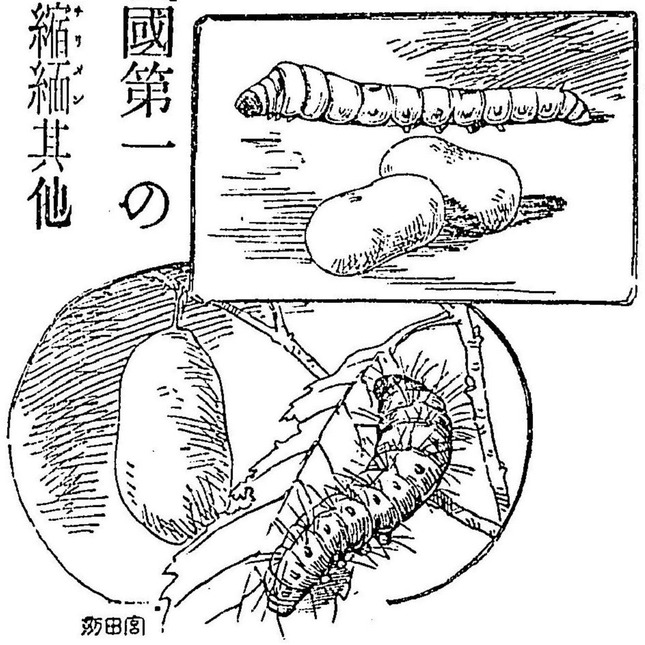
さかる後、汝等の背丈けに合せて、たちぬひて、始てろの身に着たるなり。

作文　○木綿

第二十六課　蠶

○成長　○生糸　○縮緬　○繻子　○緞子　○眞綿

蠶は、桑の葉をのみ喰ふ虫にて、初は、黑く小さくて、毛虫の子ゐにたれど、桑の葉を喰ふに從ひて、成長し、四五十日も過ぐれば、太く、白く、すきとほる樣になるなり。かくなれば、口より糸を吐き出し、我身をまとひて、巣を作り、其巣を其内にねむる。其巣を繭といふ。此繭を煑て、其糸をほぐし、繰りて生糸となす。此生糸は、我國第一の産物なり。又繻子、緞子、縮緬其他



種々の絹類を織る可き糸、及眞綿等は、此繭より製す。蠶の類に、天蠶といふあり。これは、樫、櫪、楢等の葉を喰ふ虫なり。其繭の糸を、絹布、縮緬などに織り入れたるを、やまゆ入りといへり。蠶を養ふ地は、諸國にありといへども、最もさかんなるは、信濃、上野、下野、羽前、磐城等なり。

作文　夏の頃祭禮に人にまねかれし時の文。

第二十七課　蠶と毛虫との問答

窮屈　殺慢　快眠

○窮屈　○仕合　○あなどる樣に　○安樂に
○亡ぼす　○ふみにじられたる

或時、一つの毛虫、蠶の處に來り、蠶に向ひて、「私は君たち程、仕合惡いものは有るまいと思ひます。君たちは、常に其樣なるせまい物の内に、れーこめられて、窮屈な目にあうた上、はてには、人のために、情なく煮殺さるゝではござりませぬか。　さかし、それも君たちが、餘りにれこゝろよーの上に、私共

の樣な、いかめ〜い針を持さぬからで有りませう」と、我身をほこり、かつは蠶を慢る樣にいひかけたり。蠶は、つく〳〵と聞いて居さり〜が、「君の樣に、惡い所のみ言ひ立つれば、誰れも、仕合な者は有りますまい。私共が、かやうに〜て居ればこそ、人にも愛せられ、常に好きな桑の葉を食うて、一生を安樂にくらし、終には、快く眠につかれます。それを、君は、何の能もなく、なまなかな針の自慢ばかり〜て居らるゝと、かへりて人に惡まれ、身を亡ぼす種となりますぞ」といふ時、「オ、いやな虫が」といふ聲の下に、たちまち、ふみにじられたるは、其毛虫なりき。

作文　○話の書取。

第二十八課　裁縫

○股引　○足袋　○蒲團　○志めせるは　○一反　○羽織

此圖に志めせるは、一反の綿布を裁ちて、通例の衣

縫　袖　巾　袂　袴　帶　股

服の袖、えり、たくみ、後巾、前巾となせるを見せたるものなり。およそ、衣服の裁ち縫ひは、女の職分中、最も大切なるものなれば、女たるものは、小兒の時より、心をこめて習ふ可きことなり。縫ひ方の中にて、ことに、上手、下手の見ゆるは、おくみさき、つま、袂形、袖口等なれば、よく〳〵これらに心を付くべきなり。

衣服の類には、袷、單物、綿入、浴衣、帷衣、羽織、袴、半天、帶、股引、脚半、足袋、夜着、蒲團等其他種々のものの有りて、其裁ち方、縫ひ方をことにす。されば、品により、其職にあらざれば、能はざるものも有れば、これらは、仕立屋に頼むべし。

仕立屋には、通例の着物を裁ち縫ひするものと、足袋、股引の類のみを仕立つるものとあり。

作文　○秋の頃、生糸の價を問ひにやる文。

第二十九課　衣服の色　○萌黄　○千草　○紅花　○紺

衣服の色には、白、黑、赤、青、黄、紫、萌黄などの外、紺、花色、淺黄、小納戸、千草、紅、茜、鳶色、葡萄色、藤色、桃色、柿色、蒲色、あめ色、鼠色等、其種類かぎりなく多し。

萌　紺　淺　紅　鳶　藤

其内、紺、淺黄、小納戸の類は、藍の葉を製したる汁にて染むるもの多く、紅色、桃色の類は、紅花といふ草の花より取りたる汁にて、染むるもの多し。

藍　料

其他、染色の種類により、種々のものを用ふれど、染むる品は、何によらず、染草又は染料といひ、これを染むるものを、染物屋、又は紺屋といへり。

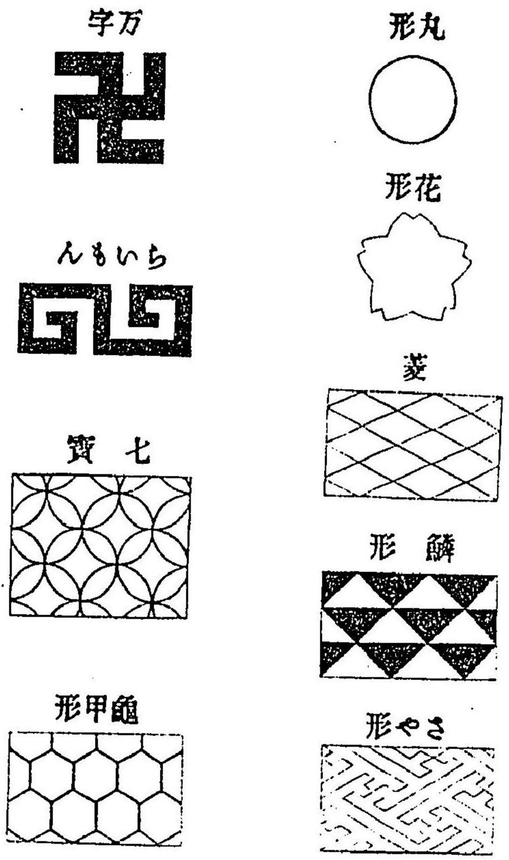
作文　○話の書取。

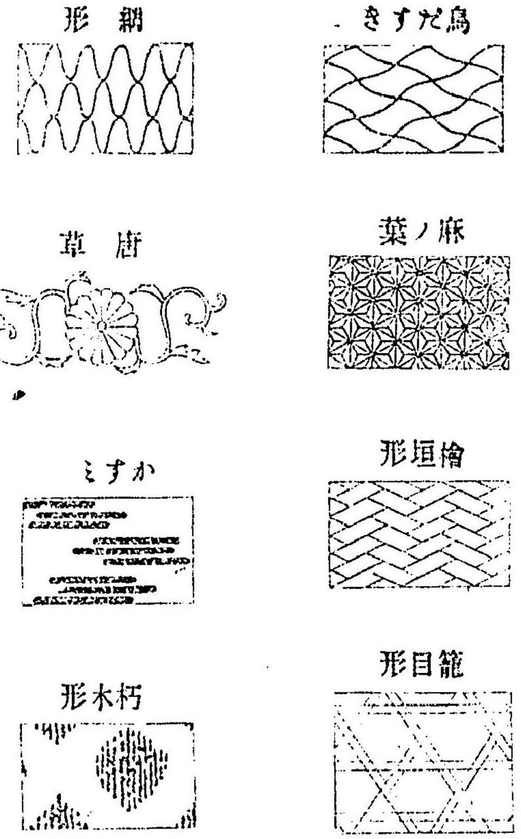
第三十課　衣服の模樣　○無地　○蒔繪　○碁盤

模　碁

れよう、衣服に、無地、形付、染模樣、縞などの類ありて、縞には、竪縞、横縞、格子縞、碁盤縞、飛白等の品々

あり。又模様の種類は、縞類と同じく、日々新模様出づるがゆゑ、其數かぎりなしといへども、多くは、左の模様をくづし、又は組合はせたるものなり。其模様は、丸形、花形、菱形、鱗形、さや形、万字、らいもん、七寶、亀甲形、とりだすき、麻の葉、檜垣形、籠目形、網形、唐草、かすみ、朽木形、其他花、葉、枝、鳥、虫などの散らし模様等是なり。これらの模様は、衣服の上のみならず、





畫師、彫刻師、蒔畫師、其他模樣を取り扱ふもの、常に心を留むべきものなり。

作文　冬の頃、衣服の裁縫を頼みやる文。

小學讀本卷之三終

明治廿三年四月十八日出版
版權所有　文部省編輯局藏版

此書籍ハ賣捌人ノ手ヲ離ルヽトキ何等ノ名義ヲ附スルモ定價ニ超過セル金額ヲ買手ヨリ拂ハシムルコトヲ許サズ

（定價金六錢八厘）